

# 季報

二松学舎大学附属図書館  
Quarterly Report

## No.121

2025（令和7）年3月

- P2 心の図書館 福島一浩
- P3 新入生にお勧めの本 野村啓介／手賀裕輔
- P4～5 千代田区番町文学散歩
- P6 国土地理院「地理院地図」の紹介
- P7 本学所蔵資料紹介 / 書評キャンパス
- P8 本学教職員著書紹介

# 心の図書館

文学部中国文学科 特別招聘教授 福島 一浩

書を生きる者にとって発表する作品は一つの到達点。これまで蓄積したもの、書思想の鍛錬、書表現法、他ジャンル（建築、音楽、日本画、舞踏、華道、スポーツ）における表現が自分の書の周りに大きな山脈を造り出している。書という豊饒な海からすくい上げた一滴には先達が道を極めようとした精粹が凝集されており、この一滴一滴は、書という営みが高い精神性の連鎖であり歴史を貫く生命力があることを教え、創造の火種を私たちの中に生む。

到達点があるということは、それまでに道ができてきていることであり、又、さらに次の到達点を目指し次の一步を踏み出し成長し続けてゆく。新たな書美を抽出し結集した先達の書人、作品との出会いは運命的で自分の書道観も変えてゆく。又、書物、言葉との出会いが自分の研究、書作の成長を促してきた。かつて書作の題材を俳句に求め名句と向き合ってきた中、新たな句との出会いの必要性を感じ図書館地下二階へ。エレベーターを降りて近い所の下段に俳諧の書籍たちが静かに佇んで私の手に取ってくれるのを待っていたかのようであった。明治、大正、昭和の俳人ごとの句集を手にした時、数多くの新たな作品モチーフに出合った私には至福の時間、ノートに句を抜き出し、紙面構成を浮かんだまま記す。そして「自句自解シリーズ」の書籍との出会いが、さらに拍車をかけ、面構造のデッサンに加え句意に立ち止まり自分の句のような想いになるかどうか。数週をかけて書作を試みる日々が続く。一度作品として発表しても時間という審査の眼は厳しく、再制作、他の書表現を駆使し辿り着いた作品を東京芸術劇場での個展に発表した。図書館での出会いがなければ実現していない。俳人にとっての到達点と私自身の書表現の到達点による作品は成功しているのか。

村上鬼城の句「白龍の月にかがやく白さかな」、中村草田男「身一つふかく裂けつつ一飛燕」、松根東洋城「花騒心寂を花となしにけり」…。図書館での出会いからの流れの中、俳人、高柳克弘氏（NHK俳句出演、選者、「鷹」編集長。）との縁が生まれ、俳句解釈を学ばせていただき、俳句と書作における思想の鍛錬を続けている。

建築、音楽、舞踏、日本画、華道において高い境地に到達された方々の書物を読み続けているが、これらは特に私の心の図書館に次々に蓄えられている。書を生きる者として高い精神性の連鎖の中に生きる書人の言葉にも精粹が凝集されているが、書人でない方々からの書への眼差しにも心を打たれ心の図書館に蓄えられている。

日本文学研究家ドナルド・キーン氏の祝允明<sup>しゅくいんめい</sup>の見事な巻物に感激され「書が持つ美は歌劇の音楽。」「最高の詩に最高の書の伴奏がつけば本当にすばらしいものになる。定家の新古今や近代秀歌の原稿はその理想に近いであろう。」

詩人、大岡信氏は「書は芸術諸ジャンルの中では最も舞踏に近い。一瞬一瞬消滅してゆくおのれ自身の命の軌跡をあたかも魅せられた名舞踏家が空間に一瞬一瞬おのれの命の形を刻みこんでゆくように紙上に刻みこんでゆく。」

近年、私の書作研究のテーマは和漢交響。平安中期に道風、佐理、行成らによって進展した日本の書、和様。私が見つめるのは、和様やかなの書を含め、中国書法との共存的な作品。一方に片寄るのではなく日中の書法を見つめ、現代書史と向き合ってきた道を探るものだ。この考え方に到達したのも、自分書道史のサードステージの大半が二松学舎大学に身を置いたことが最大の要因である。どのような新たな書美を創出することができるのかを楽しみに書を生き抜きたいと思う。



# 新入生にお勧めの本



文学部歴史文化学科 教授 野村 啓介

① 『ラテン語の世界：ローマが残した無限の遺産』（中公新書）

著者：小林標 発行：中央公論新社 2006年 946円

② 『ヨーロッパ史：拡大と統合の力学』（岩波新書）

著者：大月康弘 発行：岩波書店 2024年 1,100円

③ *Commodore Perry and the Opening of Japan, Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, 1852-1854, The Official Report of the Expedition to Japan*

著者：Matthew Calbraith Perry／Francis L. Hawks（編） 発行：The History Press 2005年 25ポンド

①は、現今の「英語帝国主義」時代にこそ読むべし！英語の根っこに、古代ローマのラテン語世界が厳然と広がるのがよくわかる。ラテン語を知れば、英語の理解力もアップするというものだ。②では、非常に大きなスケールでヨーロッパ史のダイナミズムが解説され、最近手にした新書で最も読み応えを感じた。歴史的考察力の鍛錬にもオススメ。③の著者は砲艦外交で知られるが、実は来航前に異文化（日本）の理解に努力を惜しまなかった。宮崎壽子監訳『ペリー提督日本遠征記』上・下巻として訳出されているが、原書の英文は読みやすく一読の価値あり。

読書は、簡単には会えない賢人・知識人と接する贅沢な機会でもある。デジタルもいいが、紙媒体のほうがなぜか頭に残る。紙のニオイを楽しみつつ（古本は格別だ）、ペン片手に読み進める至福の時。再読時には、当時のメモが過去の自分と対峙する機会となり、自分の成長（または未成長）を実感させてくれる。

国際政治経済学部国際政治経済学科 教授 手賀 裕輔

① 『アメリカのデモクラシー』 第1巻上下、第2巻上下(岩波文庫)

著者：アレクシス・ド・トクヴィル／松本礼二（訳） 発行：岩波書店 2005年 各924円～1,320円

② 『アメリカは内戦に向かうのか』

著者：バーバラ・F・ウォルター／井坂康志（訳） 発行：東洋経済新報社 2023年 2,640円

③ 『IT』 第1～4巻（文春文庫）

著者：スティーヴン・キング／小尾英佐（訳） 発行：文藝春秋 1994年 各1,045円

2025年、世界はトランプ大統領を中心に回っていくでしょう。民主主義（デモクラシー）を否定するような政治家が、なぜ民主的に大統領に選ばれるのでしょうか。①は、19世紀フランスの名門貴族出身の若者が新興国アメリカを旅し、当時発展しつつあったデモクラシーについて考えた書物です。デモクラシーとは、我々が思っている以上に一筋縄ではいかない政治体制なのです。②は、内戦研究者である著者が2021年のある事件を機に、これまでもつぱら他国の内戦を分析するために用いてきた理論を自分の国アメリカに当てはめるところ、驚愕の結果が判明するという内容です。そこから分かるのは、アメリカ人が政治的立場を問わず、皆強い恐怖に衝き動かされているという事実です。アメリカ人が抱える恐怖について書かせたら、キングの右に出る者はいないでしょう。その最高傑作の一つが③です。時空を超えた視点から物事を考える面白さをぜひ味わってみてください。

価格はすべて税込（2025年2月現在）

# 千代田区番町文学散歩

皇居の西に位置する番町の地名は、江戸時代に江戸城・市中などを交代で警備する六組の大番組が置かれていた名残りです。今号では、明治・大正から昭和にかけて、多くの文人が居住していた番町界隈を散策します。

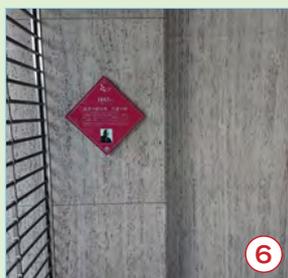
本学を出発し、内堀通りを左折して二七通りにでるとすぐに、「塙保己一和学講談所跡」①があります。江戸時代後期の国学者である塙保己一（1746～1821）は、1793年に幕府の公許を得て和学講談所を設立し、国史・律令を講じました。1819年に国史・国文などの典籍を収めた『群書類従』全665冊を刊行する大事業を成し遂げました。

二七通りを進んだ東京家政学院大学の校門脇には、『明星』発祥の地②と「大橋図書館跡」③があります。1900年に創刊された新詩社の機関誌『明星』は、主要同人として高村光太郎（1883～1956）や北原白秋（1885～1942）らが寄稿し、当時の歌壇・詩壇に大きな影響を与えました。大橋図書館は日本有数の出版社であった博文館の創設15周年記念事業として1902年に創設された私設図書館で、16歳で上京した石川啄木（1886～1912）も通っていました。

二七通りをさらに進み、東郷元帥記念公園を東郷通りへ左折すると「網野菊旧居跡」④があります。志賀直哉（1883～1971）に師事した女流作家の網野菊（1900～1978）は、『さくらの花』などの作品の中で麹町界隈の庶民生活を描きました。結婚を機に満州で暮らしますが、離婚して帰国。1942年に再びこの地に戻り、空襲で焼けるまで暮らしました。東郷通りを左折すると詩人で随筆家の串田孫一（1915～2005）が1938年から数年間過ごした「串田孫一旧居跡」⑤があります。この通り沿いには多くの文人が居住していたことから、「番町文人通り」⑧と呼ばれています。

半蔵門駅方面に向かうと、全国農業共済会館の敷地内に「武者小路実篤生誕の地」⑥があります。617坪という広大な敷地を持つ華族の八人兄弟の末っ子として生まれた武者小路実篤（1885～1976）は、29歳で転居するまでこの場所で暮らしました。実篤の私小説的な作品には、ここを舞台としたものもあります。

番町文人通りに戻ると千代田国際中学校・武蔵野大学附属千代田高等学院の校門脇には、雑誌「明星」を主宰した与謝野鉄幹（1873～1935）と妻・与謝野晶子（1878-1942）が1911年から4年間暮らした「与謝野鉄幹・晶子旧居跡」⑦があり、さらに進むと「明治女学校跡」⑨があります。明治女学校は、1885年に女子の自覚と自立を目指して九段下牛ヶ窪（現・千代田区飯田橋）に設立され、1892年に



この地に移転しました。津田梅子（1864～1929）や北村透谷（1868～1894）が教師に名を連ね、野上弥生子（1885～1985）などの作家を輩出しました。

その少し先には「有島武郎・有島生馬・里見弴旧居跡」⑩があります。実業家である3兄弟の父・有島武は、1895年に1000坪を超える広大な敷地に屋敷を構えました。学習院では皇太子の学友に選ばれた温厚な性格の長男有島武郎（1878～1923）は、1923年に軽井沢の別荘で情死するまでここに暮らしていました。作家で洋画家でもあった次男有島生馬（1882～1974）は、学習院中等科で親友だった志賀直哉らと文芸サークル「睦友会」を結成して会報で文芸評論などを発表し、また日本で最初にセザンヌなどフランス印象派を紹介しました。里見弴（1888～1983）は、二人の兄とともに『白樺』の創刊に携わり、隣家に住んでいた泉鏡花にも可愛がられました。また、同じ敷地内には「菊池寛旧居跡」⑪があります。菊池寛（1888～1948）は、有島邸の敷地の一部を1926年から1年余り借りて自宅兼文藝春秋社の事務所を置き、川端康成をはじめ多くの文化人が出入りしました。

通りを挟んだ向かいには「泉鏡花旧居跡」⑫があります。1910年にこの地に転居してきた泉鏡花（1873～1939）は、67歳で死去するまでの29年間を『婦系図』のお薦めのモデルでもあった愛妻すずと暮らしました。さらに文人通りを進むと「島崎藤村旧居跡」⑬があります。島崎藤村（1872～1943）は1936年に日本ペンクラブ会長として欧米を巡歴したのち、帰国してここに建てた新居に移り、大磯の別宅で亡くなるまでの6年を過ごしました。絶筆『東方の門』まで、晩年の作品はここで誕生しました。

そこから市ヶ谷駅方面に向かうと「内田百閒終焉の地」⑭があります。内田百閒（1889～1971）は、1937年からこの近辺に住んでいましたが、東京大空襲を経て番町内で2度転居しながら亡くなるまでの後半生を、この地で過ごしました。その間『百鬼園随筆』、『ノラヤ』など多くの作品を生み出しています。

当時の建物は残念ながら残っていませんが、文人たちが暮らした番町を歩いて往時を偲んでみてはいかがでしょうか。



空中写真で町の今昔地図が作れる

## 国土地理院「地理院地図」の紹介

国土地理院「地図・空中写真・地理調査」

<https://www.gsi.go.jp/tizu-kutyu.html>



国土地理院は国土交通省の機関のひとつで、日本の国土の地図を作っています。ウェブサイトでは、地図や空中写真、古地図コレクションなどを見ることができます。



地理院地図

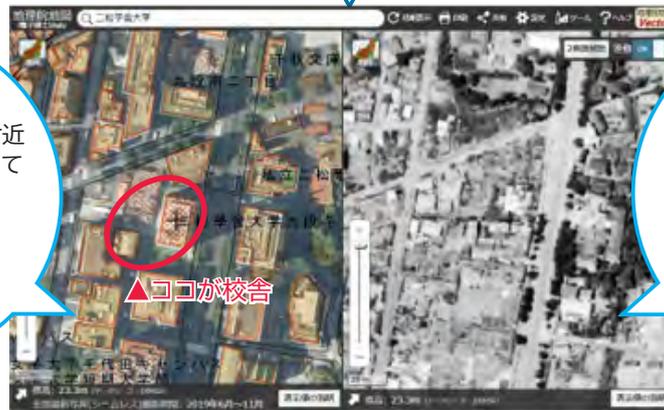
<https://maps.gsi.go.jp/>

地図や主題図、年代別の空中写真などを重ねたり、並べたりしてオリジナルの地図を作成することができます。

### 空中写真で今と昔を比べる地図を作ってみよう

二松学舎大学九段校舎付近の空中写真で今昔を比べてみました。

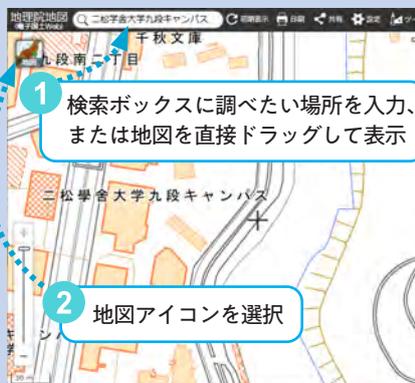
左側が最新の写真(2019年撮影)です。



右側は1945年～1950年(終戦間もない頃)に撮影されたものです。

道路の形はほぼ同じですが、建物の様子がずいぶん異なります。

### 操作手順

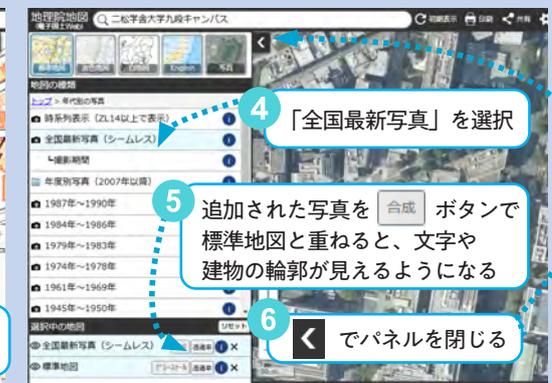


1 検索ボックスに調べたい場所を入力、または地図を直接ドラッグして表示

2 地図アイコンを選択



3 地図の種類パネルから「年代別の写真」を選択



4 「全国最新写真」を選択

5 追加された写真を「合成」ボタンで標準地図と重ねると、文字や建物の輪郭が見えるようになる

6 ◀ でパネルを閉じる



7 ツール ボタンでパネルを表示

8 「並べて比較」を選択



9 右側に表示された地図に②③と同じ手順で写真の選択パネルを出す

10 「1945年～1950年」を選択⑥と同じ手順でパネルを閉じたら完成!

画像として保存もOK!

共有 ボタンからを選択



\*場所によっては1928年頃から写真データがあります

? ヘルプ ではこの他にもたくさんの機能を紹介しています。

画像は全て「地理院地図」より

# 本学所蔵資料紹介

## 三島中洲書幅 伊藤仁齋 大正三年

三島中洲（一八三〇～一九一九）：本学創立者。  
 明治十（一八七七）年六月大審院判事を退職、同年十月漢学塾「松学舎」を設立。明治二十九（一八九六）年東宮侍講、明治四十五（一九一〇）年新帝（大正天皇）の侍講となる。大正四（一九一五）年宮中顧問官に任じられ、一等官に叙せられた。



古義復來功不孤 古義復し来りて功孤ならず

排披雲霧洒泗洙 雲霧を排披して泗洙に洒る

只論其用遺其體 只だ其の用を論じて 其の体を遺る

雨潦無源奈易枯 雨潦源無し 枯れ易きを奈んせん

朱子学を斥けて儒教の本義に立ち返ろうとしたその功績は一つにとどまらず、雲や霧を退け押し開いて、本来の儒教に立ち返ろうとした。ただその応用を論じて原理を疎かにしたのは、雨が降ったあとの水たまりは水源がないのですぐに水が枯れてしまうのと同様で、すぐに廃れてしまうのである。

（石川忠久編 『三島中洲詩全釈』 第五巻より）

週刊読書人 千代田区立千代田図書館  
 本学附属図書館 共同企画

## 書評キャンパス

書評キャンパスは、大学生がプロの編集者と二人三脚で書評を執筆する企画です。2024年度は、次の学生が書評専門紙『週刊読書人』に掲載されました。（2025年2月現在）

『週刊読書人』掲載日	書名	氏名
8月9日（第3551号）	中村文則著『銃』（河出書房新社）	渡辺 楓（文学部国文学科3年）
8月16日（第3552号）	木下龍也著『オールアウンドユー』（ナナロク社）	和田 七望（文学部国文学科1年）
8月23日（第3553号）	三浦しをん著『舟を編む』（光文社）	田中 詩織（文学部国文学科1年）
9月6日（第3555号）	甲田学人著『ほうかごがかり』（KADOKAWA）	福原千尋 （国際政治経済学部国際政治経済学科2年）
9月20日（第3557号）	青山美智子著『お探し物は図書室まで』（ポプラ社）	佐藤 葵（文学部中国文学科2年）
10月4日（第3559号）	有川浩著『図書館戦争』（KADOKAWA）	中西 光太郎（文学部国文学科1年）
10月25日（第3562号）	飛浩隆著『グラン・ヴァカンス』（早川書房）	有馬 大雅（国際政治経済学部国際経営学科1年）

過去の掲載  
 書評が読めます

2017年度～2022年度…『書評キャンパス at 読書人』  
 （本学所蔵 請求記号：019.9-S-2017～2022）

書評キャンパスの詳細内容はウェブサイトから ▶ <https://yomka.net/campus-top/>



# 本学教職員著書紹介

## 『闇の中国語入門』

楊駿驍 著  
(筑摩書房、2024年6月刊行)  
新書判 248ページ 900円+税  
ISBN 978-4-480-07623-6



この本は「(中国)語学の教科書の内容はたいていつまらない」と、(中国)語学の教員が力説するという、とても変わった本である。

本書を書くようになったきっかけは、私が中国語の教科書を100冊以上一気に読み続けた結果、そのつまらなさを洪水で心身ともに壊れかけたことだ。出版後に、これはマクドナルドを一日三食、三〇日間食べつづけた結果、肥満と鬱になってしまったことを描いた『スーパーサイズ・ミー』(2004)というドキュメンタリー映画と似ているというレビューもあった。

では、なぜ語学の教科書の内容がつまらないのかというと、そこに載っている会話や例文は基本的にポジティブで、意識高く、みな仲良くしているというキラキラした虚構の世界だからだ。しかし、外国語が使われる現場はむしろドロドロとした、人間の欲望や誤解や衝突といったネガティブな「闇」に満ち溢れていて、深みがある。

また、それは単につまらないだけでなく有害でもある。考えてみれば、大学に入ったらほとんどの学生は必修科目として第二外国語を学ばなければならないことになっている。そうすると、みな一年間語学教科書と付き合わなければならない。つまり、語学の教科書は日本の若者の大半が強制的に一年間刷り込まれる「隠れたマスメディア」にほかならない。それがポジティブな物事しか伝えないとすれば、私たちのコミュニケーションはだいぶ偏ったものになってしまうだけでなく、誰もが感じるようなネガティブな感情や、社会に対する批判もまた抑圧されることになるだろう。

トルストイの言葉に「すべての幸せな家庭は似ているが、不幸な家庭は、それぞれ異なる理由で不幸である」というのがある。ネガティブな物事の方に多様性があるということだ。それを敷衍すると、ネガティブな物事を通したコミュニケーションの方が、人々が共感し合い、つながるための方法やチャンネルが多いということになる。

中国や中国人のような複雑極まりない他者を理解し、彼らとつながるためには、多様な道があった方がよい。この本ではそれをたくさん提示した。

文学部中国文学科 専任講師 楊駿驍

### 編集後記

「季報」121号をお届けします。

今号では、定年退職する教員からの言葉と、本学教員が新生入生に勧める本を紹介しました。また、本学の学生が執筆した書評に関する情報も掲載しています。

天気の良い日は、九段キャンパス周辺の文学散歩をどうぞ。読んだことのある本も通ったことのある道も、ゆっくり見直すと驚くほど色々と見逃していたことに気づいて、何度も膝を打ってしまいます。(Sh)

二松学舎大学附属図書館

季報

第121号

発行日 2025年3月1日

発行 二松学舎大学附属図書館

九段図書館 〒102-8336 東京都千代田区三番町 6-16

電話：03-3263-6364

柏図書館 〒277-8585 千葉県柏市大井 2590

電話：04-7191-8758

印刷所 株式会社 サンセイ